

# 整備事例集 vol.14

令和元年度整備事例集



私たちのまちを  
私たちでつくる  
きっとまちが好きになる



## 掲載事例

- ① 歴史と環境をテーマに安心して楽しめる里海公園づくり(金沢区)
  - ② 鶴見の多文化・多世代の共創拠点づくり まちのリビング(鶴見区)
  - ③ 世代を超えた集いの場にするための拠点づくり(南区)
  - ④ 太陽とコミュニティで耕すもろおかエコステーション(港北区)
- ④は平成29年度整備

ふ-しん【普請】「普く請う(あまねくこう)」とも読み、「力を合わせて作業に従事すること」という意味が含まれています。

「公共」は行政によってのみ担われるものではなく、特に地域に根ざした身近な課題への対応などに市民の皆さんが主体的に関わることで、参加する人や地域に暮らす人々の満足感を高めることにつながっていきます。「まち普請」には、市民に身近な「まち」に「普請」の輪を広げたいという願いが込められています。

# 世代を超えた集いの場にするための拠点づくり(南区) 「おもいやりハウス」

南区中村町で子育てサークルの活

動をしていた津ノ井さん、根島さん、吉永さんは、近隣のケアプラザで開催したイベントで高齢者にグッズを作ってもらったり、子どもたちが高齢者とふれあう姿を見て、多世代がつながる面白さを感じていました。そして、イベントの時だけではなく、日常的に子どもと高齢者が交流できる場があればと考えるようになりました。「子育てにはお金も必要！子育てを優先しつ



一見普通の住宅に見えるが、手すりの看板やクレープ販売のカウンターが内と外の距離感を縮めている

つ、地域を見守り働ける場所がほしい。地域にないなら自分たちでつくろう！」とおもいやり隊を結成します。

中村町周辺は坂が多く、高齢化も進んでいて、買い物に困っている人が多くなります。「そういう人たちのために販売会をやってみたら？」というアドバイスを受け、買い物難民が多い坂の上の地区で平成30年2月から、定期的に野菜やパンを販売するマルシェを始めました。利用者も多く、「もっと色々な商品がほしい」という声を受け、買い物代行も始めます。活動が軌道に乗ると「地域住民の交流拠点が欲しい」という思いが強くなりました。そんな時に、地域ケアプラザで行われた勉強会でまち普請を知り、「私たちにぴったりの制度だ！」と、すぐに応募することを決めます。

多世代が集う「銭湯」でマルシェを行うことで、地域のつながりを豊かにするというアイデアは二次コンテストを通過しますが、計画が具体化する中で様々な課題が顕在化し、別の場所を探



改修もできるところは自分たちの手で رفت

すことになりました。地域の空き家を探し回り新たに見つけた場所も、検討を進める中で断念せざるを得なくなりました。ほぼ諦めかけていたところ、地域の人の協力もあり、二次コンテストの直前によく場所が見つかりました。

しかし、やっとの思いで見つけた空き家は耐震性に問題がありました。そこで耐震工事の資金を集めるために、おもいやり隊はクラウドファンディング※3にチャレンジします。ちょうど横浜市が、地域まちづくり活動を対象としたクラウドファンディングの活用支援事業(試行)を立ち上げたタイミングで、その第1号として支援を受けることが決まりました。当初は資金が集まるか不安もありましたが、銀行からの融資や他の助成金を申請する計画も合わせて提案し、無事二次コンテストを通過することができました。

地元からの寄付やクラウドファンディングで耐震工事の資金を集め、さ

らに人伝でで大工さんや電気屋さん、個別に掛けあい、メンバーも工事に参加するなど、何とか整備費用を抑えました。そんな苦勞を乗り越え、令和元年10月に多世代交流拠点「おもいやりハウス」が完成します。

おもいやりハウスでは、「横浜市介護予防・生活支援サービス補助事業」(通称、サービスB)で高齢者向けのサービスの提供したり、お弁当や駄菓子販売を行い、大人も子どもも気軽に立ち寄れる工夫をしています。友達のお母さんが運営しているという安心感から、放課後は多くの子どもたちが集まる居場所になり始めていました。

しかし、日常的に高齢者と子どもが交流する理想の場所が出来上がった矢先に、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、おもいやりハウスは令和2年4月から2か月間休業することになります。二次コンテストからおもいやりハウスのオープンを挟んでずっと走りつづけてきた。2カ月間休業し立ち止まったことで、おもいやりハウスが地域に何を生み出せるのか改めて考えるきっかけになった」と津ノ井さんたちは教えてくれました。「コロナ禍が続く中、お弁当の販売から活動を再開して、さらにフードパントリー※4を始めるなど、こんな時だからこそ必要な取組を行っています。



子どもだけでも親子連れでもふらっと立ち寄れる場所に。  
コロナ禍明けが待ち遠しい

「休業中にいろいろなアイデアも生まれてきている。そのアイデアを実現していくためには、おもいやりハウスを持続させること。その鍵は資金面も含めて運営を軌道に乗せていくことにある」。休業期間中にためたパワーとアイデアをもって、次のステップへと進んでいくおもいやり隊。その中心メンバーには中村町で生まれ育った根っからの地元民がいます。地域の中では圧倒的に若手ですが、周りの人たちの期待は大きく、温かく見守られながら、おもいやり隊はこの先の未来を見ています。

(おもいやり隊は令和元年5月に法人格を取得し、現在はNPO法人おもいやりカンパニーとして活動しています)



**世代を超えた集いの場にするための拠点づくり(南区)**

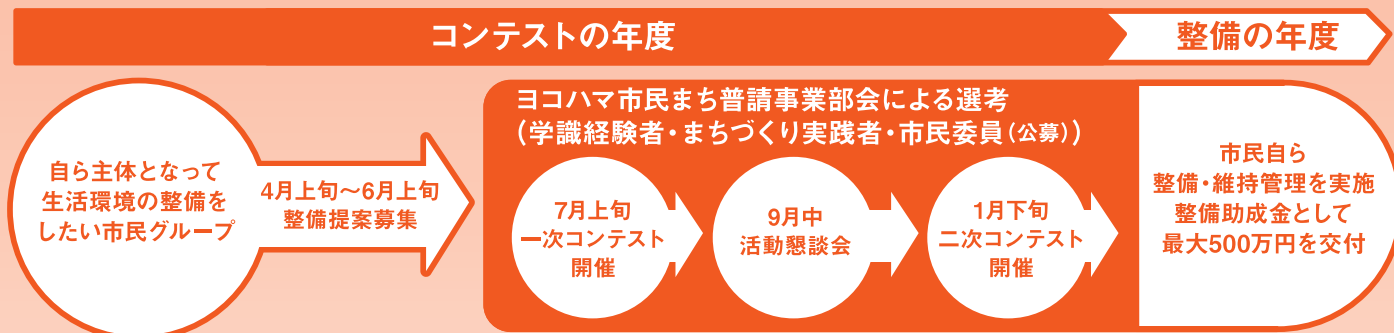
整備主体：おもいやり隊  
 整備場所：南区中村町2丁目124番地5  
 整備内容：交流拠点(空き家の改修)  
 竣工時期：令和元年10月

※3：Crowd(人々、一般大衆)とFunding(資金調達)を合わせた造語で、個人や企業、その他の機関が、インターネットを介してアイデアやプロジェクトを紹介し、それに共感し、賛同する一般の人から広く資金を集める仕組みのこと。

※4：様々な理由で生活に困っている人々に、無料で食料品などを配付する支援活動。新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、十分に食事をとることができない人々が増えたことで、この活動に取り組む人たちも増えた。

# 「ヨコハマ市民まち普請事業」とは

市民の発意とアイデアによる地域課題の解決や魅力向上に資する施設(ハード)を、身近な地域の公共空間や私有地などに整備する提案を募集し、二段階の公開コンテストにより選考された提案に対して次年度に最大500万円の整備助成金等を交付する事業です。



## 横浜市地域まちづくり推進委員会

ヨコハマ市民まち普請事業部会委員(平成30年度選考委員) ※所属は平成30年度時点

- 岡本 溢子 NPO法人さくら茶屋にししば理事長(まちづくり・市民活動)
- 男澤 誠 市民(公募委員)
- 河上 牧子 明治大学地域ガバナンス研究所客員研究員(都市政策)
- 川原 晋 首都大学東京\*都市環境学部教授(市民主体の地域運営・まちづくり市民事業) ※現在は東京都立大学
- 塩入 廣中 市民(公募委員)
- 菅 博嗣 (株)あいランドスケープ研究所代表取締役(花とみどり・公園緑地)
- 杉崎 和久 法政大学法学部教授(公共政策)
- 鈴木 やよい NPO法人横浜市民アクト理事(まちづくり)



## ヨコハマ市民まち普請事業

# 整備事例集 vol.14

令和元年度整備事例集

- 発行 令和3年2月  
横浜市都市整備局地域まちづくり課  
〒231-0005 横浜市中区本町6-50-10 TEL 045-671-2679 FAX 045-663-8641
- 編集・デザイン 横浜市住宅供給公社
- デザイン・印刷 山陽印刷株式会社



「まち普請事業」についてはホームページをご覧ください。  
<https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/machizukuri-kankyo/toshiseibi/suishin/machibushin/>

Facebook「ヨコハマ市民まち普請ひろば」もご覧ください。  
<https://www.facebook.com/yokohama.machibushin>

Webで検索

Webで検索